



Data	
監督・脚本:	スティーグ・ビョークマン
出演:	イングリッド・バーグマン/ イザベラ・ロッセリーニ/ イングリッド・ロッセリーニ/ ロベルト・ロッセリーニ/ ピア・リンドストローム/ フィオレラ・マリアーニ/ リブ・ウルマン/ シガニー・ウィーバー/ ジャンーン・ベシंगा
	—

■ショートコメント■

◆本作はイングリッド・バーグマンの生誕100周年を記念したドキュメンタリー映画だから、彼女は1949年生まれの私にとって父親世代の女優になる。7度のアカデミー賞ノミネート、3度の受賞歴を持つそんな大女優に、私がスクリーン上で出会ったのは、中学3年生の時に『誰が為に鐘は鳴る』(43年)を観た時。この世にこんな美しい女優がいるものかと目がテンになったことを、今でもよく覚えている。

『カサブランカ』(42年)での「君の瞳に乾杯!」の名セリフはスクリーン上では聞いたことがないし、当時ハリウッドの超大作と言われた『ジャンヌ・ダーク』(48年)もスクリーン上では観ていない。また彼女が40代、50代になってからの出演作はほとんど知らないが、私にとってイングリッド・バーグマンの名前は『誰が為に鐘は鳴る』の一作だけで鮮明に刻み込まれていた。そんな私にとって本作は必見だったが、やはりドキュメンタリーはイマイチ・・・。

◆彼女は小さい時から父親が撮影するカメラの前で育ったこともあり、生涯演じることを愛したらしい。それは、もちろん自分の才能を信じたためだが、同時に愛も信じ、自分の気持ちに正直に生きたようだ。そのため、夫以外の男性との恋や妊娠等を経験し、保守的な時代であった1950年代には世間から非難を浴びたらしい。しかし、本作の製作に力を注いだ彼女の娘で、女優であるイザベラ・ロッセリーニ等が本作で語るイングリッド・バーグマンの人物像を知ると、彼女の家族や子供たちに対する深い愛情を知ることができる。

要するに、普通の女性は家族や子供への愛情だけに生きていた時代に、イングリッド・バーグマンは女優としての才能があったためその両立を望み、同時にそこで苦勞せざるをえなかったということだ。

◆イングリッド・バーグマンはスウェーデンからアメリカ(ハリウッド)に渡った後、さ

らにアメリカからイタリアやフランスに渡って生きた珍しい女性。それと同時に、手紙や日記はもちろん子供の頃のパスポートまですべて捨てないで持ち続けていた女性だったというから、それも珍しい。大きな家を購入して家族とともに住んでも、そこに定住せず、次の新しい世界を望んだわけだが、そのたびに荷物もすべて移動させていたというのは驚きだ。そんなすべての記録（荷物？）が残っていたからこそ、本作を作ることができたわけだ。

本作ではしばしば彼女の日記が読まれることになるが、そのみずみずしい感性にはビックリさせられる。いつもいつもここまで率直に自分の気持ちを表現できる人は数少ないはずだ。

◆本作によってイングリッド・バーグマンという女優の全体像を知ることができたのは有意義だった。しかし、それはあくまで現時点での私の知識が増えたというだけで、中学3年生の時に大きなスクリーン上で若き日のイングリッド・バーグマンという女優を見た時の感激とは全く違うものだ。本作を観賞した後、私のホントの気持ちは「あの時の感激をもう1度」というものだったと気づいたが、所詮それは無理なこと・・・？

2016（平成28）年10月5日記